

1895年の下関条約で台湾は日本に割譲された、と教科書には書いてある。まるで手から手へ譲り渡されたような印象を受けるが、実際には台湾住民の激しい抵抗があつて、日清戦争を上回る犠牲を出している。動員された軍人と軍夫はあわせて7万数千人、大江志乃夫氏の言葉を借りれば「台湾征服戦争」ともいべき戦いが半年にわたって展開されているのである。



それでも治安穏やかならず、台湾総督府は「軍政機関」として成立した。総督は陸海軍の大將か中將が担任することになり、憲法や法体系を超えた権限が付与された。台湾の人たちは、そうして現れた新しい支配者を「土皇帝」と呼んだ。「田舎の島の王様」とでも皮肉つたのであろうか。

半世紀の間に19人の総督が入れ替わった。そのうち現職のままなくなった

総督が一人だけいる。第七代の明石元二郎中將である。明石は九州へ帰省中に病死した。遺体は遺言に従つて台湾へ運ばれ、台北市内の日本人墓地に埋葬された。1919年のことである。

戦後、墓地には大陸の難民が押し寄せスラムを築いた。

1997年になって当時の陳水扁市長の指揮で墓上のスラム街が撤去された。おびただしい墓石とともに鳥

は寄贈された郊外の墓地に改めて埋葬された。第七代総督はこれで遺志どおり、永遠に台湾の土地に眠ることになった。その遺志には台湾を永遠に日本の領土にするという決意が込められていたらしい。

大日本帝国が去つたあと、台湾には新しい「土皇帝」が天からふつてきた。統治権を引き継いだ中国国民党が共産党に追われて政権もろとも台湾に逃亡

第三十九回——柳本通彦 三十年目の埋葬



やなぎもと・みちひこ
京都市生まれ。著書に「先住台湾民・山の女たちの聖戦(現代書館)」
「台湾革命(集英社新書)」など。
99年度「潮賞」ノンフィクション部門優秀賞受賞。

居を伴つた明石総督の墳墓も現れた。260万都市の中心部にとつじよ日本の鳥居が屹立した。掘り返すと、明石本人の遺骨が確認された。

その措置に陳市長は頭を抱えた。保存せよ、破壊せよ、二つの意見が沸騰した。80年前の土皇帝の亡霊が市民を右往左往させた。

結局、鳥居はこつそり市内の公園の一隅に目立たないように据えられ、遺骨

ガードが施されて台湾北西部の景勝地に安置されたまま故郷に帰る日を待ち続けてきた。
しかし、大陸の奪還が夢物語に終わり、統一の可能性が現実化しないまま中国国民党の存在そのものがあやうくなつてきたところへ、遺族の一部から台湾で埋葬する意向が示されたというニュースは内外をあつとこわせた。
一方には、台湾当局が葬儀を行つて埋めよという意見がある。他方には、多くの台湾人を殺戮した独裁者に公費を使うとは何事かという反論がある。またまた陳水扁総統はハムレット状態に陥つた。陳水扁さんはよほど皇帝のご遺体に縁があるものらしい。二つの遺体の措置をめぐる論争は、台湾史観や台湾の進路もからんで、微妙な選択を迫りそうだ。

して来たのである。台湾人の反抗を戒厳令を以て押さえ込み、40年にわたる「白色恐怖」政治を貫徹した。独裁者として君臨した蒋介石・蔣経国父子は大陸領土の奪還と国家の統一を悲願としており、その日まで遺体は埋葬しないように遺言していたものらしい。

蒋介石総統は75年4月5日、蔣経国総統は88年1月13日にそれぞれ台北で死去しているが、二人の遺体は特殊な



台北市内にこつ然と現れた明石総督の墓。後方はリージェント・ホテル(97年撮影)